

伊藤祐二 (作曲家)

ユー・ジ 斧に
気をつける

解題

編集長の池田さんは「サイコホラー映画みたい」と御指摘になった。確かに。やはり本稿タイトルの説明をせねばなるまい。

このタイトルは、イギリスのロックバンド、ピンクフロイド初期の曲「ユー・ジ 斧に気をつけろ」(Careful With That Axe Eugene) から来ている。と書きつつ、読者諸氏の失笑が目につかぶ。もちろん、私の名前に掛けた訳で……。

中学三年生の頃、私はラジオによって、たくさんのお音楽と出会っていた。ある日、何だか妖しい音楽が。ピンクフロイドというバンド名も初耳だった。 Hammondオルガンの響きとモダンなフレーズ、単純なベースとシンバル、歌は無くても、でも変な声が聴こえてくる。静かで妖しい持続。しかし、3分を超えると曲は矢庭に盛り上がり、突然、囁き声が聞こえてくる(Careful with that axe Eugene) そして次の瞬間、絶叫が始まった、腹の底から絞り出すよ

うな、恐ろしくも長い絶叫。私は総毛立った。ドラムのフィルが入り、曲は荒々しく盛り上がり、絶叫は何度も繰り返される。そして、やがて、ゆっくり、ゆっくり、静まっていき、曲は終わった。(8分半)

衝撃だった。まさに、衝撃だった。こんな音楽があり得るのだ、と。

この時の「こんな音楽があり得る」という衝撃は、作曲家としての私の方向性を決める潜在的な力の一つになったと思っている。(この曲は、形と曲名を変えて、アントニオ・ニ監督の映画「砂丘」の有名なラストシーンにも登場する。)

解題はこのくらいにして、本稿では、私が衝撃を受けた曲——いい曲だと深く動かされたり、面白い曲だと興味を持ったたり、ではなく——「瞬間的に衝撃を受けた曲」をご紹介します。

●モートンフェルドマンが、ジョアンラバーバラの為に書いた「スリーヴォイセス」(Morton Feldman: Three voices) という曲には、彼女自身による多重録音のCDがあり、演奏時間は50分近い。歌詞の無い、母音で重ねられる音(声)で始まり、それが延々と(美しく変化しながら)続く。そして20分近く経った所で、突然、

Who'd have thought that snow falls と始まる歌詞が現れる。この、歌詞が現れた瞬間、私は椅子から落ちそうになった。この瞬間は、衝撃的に美しい。そして、歌詞が現れるまでの20分近い長さは、その瞬間の為にどうしても必要な長さなのだ。

●モーツァルト…フーガハ短調 K426 (2台4手のクラヴィアの為の)

この曲は、バッハの影響と思われる、重厚で半音階的な、純然たるフーガだ。初めて聴いた時、その厳しく、複雑で衛学的な対位法の技術、つまり、古いタイプの音楽“を完璧に書きこなすモーツァルトの力量を再確認しながら聴き進んだ。そして、ストレットでの眩暈がするような技巧的クライマックスを経てテーマが再現すると、突然、アルベルティバスが現れ、その上にテーマの反行形が単旋律で颯爽と歌われるのだ！ 私は椅子から落ちそうになった。時代精神、批評的センスを、これほど颯爽とかっこよく歌うなんて！

●コラヴォケールの歌う「こんな風に愛されるなんて」は、彼つてこうなの、と歌う惚気の歌なのだが、歌い喋り笑い自慢し科を作り吐息し涎をたらし跳ね上がる。衝撃的な歌唱技術に椅子から……。